
ポケモンの世界に来てしまいました。

追憶の俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンの世界に来てしまいました。

【NZコード】

N1489Y

【作者名】

追憶の俺

【あらすじ】

目覚めたところ、そこはポケットモンスターの世界……

突如その世界に迷い込んだ青年、「九堂 椿」は「元の世界に帰る」なんて事は考えず「この世界で人生を楽しもう」などという考え方で持ち前の廃人知識を使い、その世界に一歩ずつ足を踏み入れていく

…

これは廃人とポケモンの不思議な不思議（笑）なお話

本作品は「」の通り廃人要素が入っています。また非公式シリ

ー^トズの地方、人物、ポケモンなどが登場するので苦手な方は「もどる」をオススメ致します

「はじめに」

どうも、はじめまして。追憶の俺です。

小説を書くのは初めてなので、至らぬ点などござりますが、宜しくお願いします。

なお、「|田|」一回、不定期連載になるかもしれません

この小説は、最強系オーナー、後に非公式のポケモン、キャラ、地方などし登場ますので、

そういうのが苦手な方は「もじる」をおススメします

ちなみに何処かの催眠厨のよつて証説で無双などはしないかも
しません（笑）

それでもOKなたは、お進みください

それでは追憶の俺の素敵な冒険（笑）話をとべどり覧あれ

「それは、突然起きた……

田を覚ましたら……違う所にいたんだ……」

第一話 田覚めたといひは……（前書き）

あまりにもグダグタなので修正
第一話です。どうぞ

第一話 田覚めたといひ方は……

第一話

あ……れ……？

「此処……何処だ？たしか……昨日寝てそれから……駄目だ全然思
い出せねえ……」

見渡すところ縁の木々ばかりで何処かも分からぬ……多分森に迷
つたんだろう……多分

「それで、どうする……かな」

青年が歩みだそうとするが、何か黒いものが飛び出した。
そして青年を見つめる……

「ん……？」

青年が田を擦り、再度確認する

「ちよつとまてよ……へー」こいつどうかで見たことあるような……え
……マジ……か……？」

突然出てきた「何か」を青年はを知っていた……否、彼にとっては
知らないはずもない

「夢……じゃないよな……」

それがこいつとの旅の始まりだった

To be continued....

第一話　田覚めたといひは……（後書き）

次回、主人公の名前が出てきます。

第一話 ポケモンの世界に来てしました。（前書き）

一話目です。はじめ

第一話 ポケモンの世界に来てしました。

「黒いやつ」と出会って数分経ち……未だに森の中をさまよっております。この歳で迷子だなんて……

で、その「黒いやつ」は……

「ズバツ！ズバツ！」

と、多分「あっちだ」と道案内してくれるようですね。

ちなみにこいつは多分ズバットというポケモン……だっけ
まあ簡単に言えば……俺は「ポケモン」の世界に来ちゃつたらし
いです。

いやあ驚いた、なんせ目の前にズバットがいるんだから、変なテ
ンションが出ております（笑）

……あ、自己紹介がまだだつたような気がする

では改めて、俺の名前は「九堂 椿」この世界だと「ツバキ」にな
るのかな。

ポケモンは努力値とか個体値厳選とか、なんか廃人っぽいことし
てたな。

んで、「」の黒いのか「ズバット」まあ真っ黒つてほじじゃないけ
ど。

ベルトについてたモンスター・ボールを確認してみると、どうやら所有者は俺らしいのでパートナーって事にしておきます。初めてのポケモンがズバットだつて？まあ育て方によって無限大の可能性があるので気になさん

もちろん元の世界に帰ろうなんて微塵も思っていない、とか方法が無いという（笑）
此處に来た以上、とことんやってやりますよー？

第二話 旅立ち（前書き）

二話目です。どうぞ

第三話 旅立ち

前回は「とにかくやってみますよ」と言つたものの、まだ森の中を彷徨つております。……自分が恥ずかしいよ。

それと驚いたことがもう一つありました。近くに綺麗な水辺があつたので顔を洗いに水面を見ると……

「あ……これホントに俺デスカ？」

そう、顔が別人みたく変わっていました。しかもHG・SSのライバルに瓜二つという。……漫画と名前同じだから?……あれ、もしかして憑依したの?俺?

……なんかツツコむの疲れてきたよ。

まあ、どちらにせよ此処を抜けないと旅は始まらないんだからさつさと此処を抜けないとな……

と、ツバキはズバットを見てある提案を思いつく。

(たしかこいつ「そらをとぶ」使えたような気が……それにもし憑依しているのならきっと技マシンがあるはず……)

ツバキは、腰にあるポーチからディスクが数枚入ったケースを取り出し、ひこづタイプのディスクを探す……あつた。

「へえ、一応見た目は普通のディスクにみえるけど……試すか……えーっと、これをこうして……」

付属の説明書を見ながら準備をしていく。

しばらくお待ちください……

「ううし、これでできるはず……ズバットーー!! ち来てくんな
かな?」

「ズバ?ズバッ」

と、ズバットは嬉しそうにツバキの方へ飛んでいく

「よし、んじゃ、いーいをいーいして……セシートー!」

.....

ズバットは新しく「そらをとぶ」を覚えた!

「じゃ、いくかーズバット、そらをぶーー!」

「ズバッー!」

そして俺たちは大空へと飛び立つていった……

「さあ、冒険の始まりだ！」

第三話 旅立ち（後書き）

なんか打ち切りみたいな終わり方しましたが、まだまだ続きます
(笑)

「そらをとぶ」使用時のポケモンのサイズとかはまあ、仕様なので
気にな(r y)

ツバキ「やがましい」

ぶふああああああああ！？

ツバキ「次回もお楽しみに」

第四話 カントー地方（前書き）

すこし更新が遅れました。では、どうぞ

第四話 カントー地方

あの日から一年経ち……今、カントー地方にいます。はい、飛ばしうぎですね。

あれからホウエン、トーホク地方をまわって今のようになつてあります。ちなみにトーホク地方は非公式シリーズの地方で、カントーの遙か北の方向にあります。

あと一年間パートナーだったズバットはどうと……

「ズバッ！」

はい、進化させずにそのままにしております。ポケモンは、進化前でもやたらと強い個体も作ることも可能なのです。ズバットでも。ズバットでも。（大事なことなので二回言いました。）

さて、今どこにいるのかといつて、一ビシティに来ております。

多分ジムリーダーはタケシのはず……なのですが……

「おまえが挑戦者か？俺が相手をするぜ。」

聞こえた声は幼い声、あれ、タケシじゃない……

「あれ、タケシはどこだ？」

思わずそう聞いてしまつた。すると

「ああ、兄ちゃんなら旅にでたぞ。」

はあ！？なんで旅に出でんだよー！？ここはアニメの世界に来たのか俺は……何かの冗談ですよね、ははは……だつて一年も旅してたんだから、気づかない筈が無い筈……

「はあ……んじゃ、やるか……」

ため息をつき、だるだるに呟つ。ああ、なんかため息ばつかだなあ……

「では、これよりジムリーダー♂挑戦者ツバキの試合を始めます！なお、ポケモンの入れ替えは、チャレンジャーのみとします！」

ジムリーダーよりも幼い声が言う。……兄弟何人いんだっけ？なんか観客席っぽいどこも同じ顔してる奴いるし。おっと、始まりそうだな

「それでは、始め！！」

審判の声がスタジアムに鳴り響く！

さあ、始めようか！！

「バトル スタンバイ！！」

戦いの火蓋は切つて落とされた……

第四話 カントー地方（後書き）

「なあ
ん？」

「なんで飛ばした？」

え、えーっと、その、『じゅうじつとうべぐはああー…？』

「次回もお楽しみに！」

……なあ

「ん？」

なんでここにいるんだ……だ……？

「そりをどぶ」

え——

第五話　「レジムの戦」（前書き）

五話目です。エリナー。

第五話　「ヒジムの戦い」

「それでは始め！」

と、高らかに声がジムに鳴り響く。

「ゆけつ！ハガネール！」

ジムリーダーはハガネールか……タケシのやつだよね。絶対。はあ、どんどんアニメフラグがあ

「……バタフリー、バトルスタンバイ」

ダルそうに言う……まあ出すとき「バトルスタンバイ」って言つたのは、迷つたんですよね、最初。んなわけでシンジくん、餃子あげるからさ、許してね。

さて、相性的にはこちらの方が不利だが、こいつには秘策ある……といつてもゲーム世界の一般的戦略だが

「相性ではこちらの方が有利、交代します?」

「まさか、こいつで……倒すんだけど。」

「……わかった、ハガネール！いわなだれだ！！」

いわなだれがバタフリーに直撃すると思われたが……

「……いない！？」

「後ろだよ、ねむりごなーー！」

と、バタフリ―は緑色の粉をハガネールに振り掛け……

「ネ——ル！？」
.....ZZZ

直撃し、眠り状態に

もともと素早さが低い」と、そしてバタフリーの特性である「ふくがん」によってかわすことはおろか、至近距離で撒いたのでほぼ確実に当たるはず。

「くつ……でもどうせひって攻撃を

「簡単な事、みがわり」

11

そう、「みがわり」は自分の体力を削って、代わりに自分の「ダメー」を出す変化技

一般的にはこの間に積み技とか、やつたりするのかな

さあ、この嫌がらせをジムリーダーさん、突破できるかな？（笑）

「なあ… もどれ！」

おつ、交代か、眠つてたらいかに自分が不利になるか解つてゐね、
さあ次は何しようかな……

第五話　一ヒジムの戦い（後書き）

はい、ツバキが危ないです（笑）
私自身バタフリーハメられましたので……
次回もお楽しみにつ！

第六話 ジムリーダーは初心者（前書き）

六話目です。相変わらず短いですが、どうぞ

第六話 ジムリーダーは初心者

交代か…… わたしもつかなか……んーなんか戻れてるような……

(交代はチャレンジャーのみとしますー)

あ…………思れてるね。完全に

「なあジムリーダーさん。」

「…………? ?」

気付いてね——

「あのセー、交代つてチャレンジャーだけじゃあなかったっけ?」

「…………す、すみませえでした————」

おこいこいこいこいこい——覚えどかよおおおおつ——

心中で呟く。てかジムリーダーさん。覚えてるつよ。マジで。そんなリアルに土下座をされたなあ……

「……じつは最近ジムリーダーを任せられたばかりで……」

なる。つてかこんな子供に押し付けるのか……そもそも子供でもジムリーダーになれるのか？あんま覚えてないや

まあともかく……

「……基礎くらいには覚えよつか」

「……はい……」

なんかこいつほんとにジムリーダーか？つて思つたわ……わざの勢いはどうした？はあ、疲れる。

「と、とつあえず……もうこっかい、出て来て、ハガネール」

「……ணண」

やつぱし寝たまんまか……しゃーない、バトル続行だな

後でハガネール誰のか聞いてお！」

第六話 ジムリーダーは初心者（後書き）

はい、交代はチャレンジャーのみなのに何故入れ替えたか。そのりゆうを書いてみました。次からはマトモなバトルをします。……多分ツバキ「多分かよ」

では次回もお楽しみ

第七話 本当のバトル（前編）（前書き）

我慢できなくなりました。
すいません、七話目です。どうぞ

第七話 本当のバトル（前編）

取り敢えずバトル続行とはなつたが、まだツツコんだとこあったんだよね。例えば「使用ポケモン」とかさ

聞いてみたところ、やっぱり審判忘れてたらしい

一応確認だがこの世界のジムバトルは大体は「使用ポケモンは三体」のシングルバトルで行う。道具については使用は禁止、持たせるというのはまだ広まつてはいない。俺が旅したトーホク地方は持たせるのは実用化されていたが広まるまではまだまだつてとにかく

ツツコミ所満載だが仕方ないかな……

「さて……バトルするか

「は、はいっ！」

うん、緊張してるね。それはさておき……今ハガネールは眠っていて立場的には不利。しかし、あのハガネールが借りたやつだとすれば……眠っている状態でも行動可能な唯一の技、「ね」と「覚えている可能性だつてある

防御の種族値が200とパルシェンをも超えるタフさでタイプ一致の弱点技を食らつてもまず落ちない。

対する特殊技には弱くタイプ不一致でも弱点を突かれれば一撃で倒されることが高いという欠点が。

よりタフにするなら「ねむる」そしてそれを併用した「ね」と「を覚えていても別におかしくは無いとは思つ。現に「ステルスロック」を撒いて「ほえる」で交代させたり、相手の防御が高ければ「どくどく」んでピンチになりや「だいばくはつ」とこつたやうじ型も存在するんだし混ぜても悪くはない

まあそれに気付いたらいいんだが……多分無理だろう。バトルの経験が浅そつだし…………一つ助言でもしてやろう

「ジムリーダーさん、確かに眠つていたら不利にはなるが……逆にそれを利用して相手の意表を突くことだって出来るんだよ?」

「…………」

「まあ大事なのは、焦らないこと……そして、どんなにピンチになつても必ず諦めない事だよ」

「…………?…………はい…………俺は絶対に諦めない、そしてあなたを倒します!――」

「うん、良じよ良じよ。やっぱ諦めない心つていうのははとでも大事。最後まで何が起くるか分からぬのがポケモンバトルの良じよことだよね

「いくよ、ハガネール!――」

「…………」

「やはり眠つているけど何か方法が……………そうか!」

ん、何か気付いたみたいだな

「眠っているときにも出来る事……ハガネール！ね」とだつ……

ハガネールは銀色の粒子に包まれながら回転し、バタフリーに突っ込んでいく……

あれは……ジャイロボール！？「バタフリー……来るぞ！」

「フリ～～！」

バタフリーもそれに応答し、交わす

「あくむ！」

バタフリーの目がハガネールに向かって怪しく光り、ハガネールが段々苦しそうな顔になっていく

「！ハガネールっ！？」

「あくむ……それは眠っている相手に徐々にダメージを与えていく変化技……さあいくよバタフリー！止めのねつづく……」

「フリ～～～～～～～～～～！」

羽を羽ばたかし、灼熱の突風がフィールドに吹き荒れる。元々の特防の低さ、そして「あくむ」のダメージで当然……

「は、ハガネール、戦闘不能！バタフリーの勝ち！」

「…………もどれ！……よく頑張ったね、ありがとう」

やせりポケモンに対する愛情はあるな。良いトレーナーになれると想うよ。あの子ならね

それで、面白くなつてきた！！

第七話 本当のバトル（前編）（後書き）

はい、投稿してしまいました……すいません

「あぐむ」は一世代で覚えます

主人公紹介（十一話まで）（前書き）

はい、中途半端です、じうざ。

主人公紹介（十一話まで）

主人公・ツバキ（九堂 椿）

何故かこの世界に突然トリップしてしまった青年。年齢は17。別に高校生名探偵ではない

現実ではそこそこ勉強、そこそこの身体能力と中途半端さをずっと通していたが、ポケモンの事に関しては、密かにやり込み、そしてついに「廢人」と化した。両親曰く、「勉強もあれくらい頑張つてくれたら良いのに」と呟いていたんだとか。

たまに「餃子あげるから許してね」とかキャラに対して訳の分からぬ事を言うが、分かる人には分かる「ネタ」なのであまり気にしない方が良いのかも知れない。

性格は少しめんどくさがり屋。つつこみ役でもある。こんなんだが実はトーホク、ホウエンを一度制覇してチャンピオンの称号を勝ち取った。（両方ともすぐに辞退。彼曰く「もっと旅を続けたい」とのこと。そのためか、最近、各地方でツバキを探す人が増えたんだとか）

現在判明している使用ポケモンはスバット・バタフリー・スピアー・リーフィス・フーディンの五体。

ズバットはこの世界にきて以来ずっとパートナーとしてツバキと共に旅をしてきた仲間である。某マサラ人のピカチュウ的存在

ちなみに虫タイプが好きなんだとか

まだまだ公開していないポケモンもいるが中には「神と呼ばれる
ポケモン」もいるんだとかいないんだとか
現在カントー地方で旅をしている。やはりチャンピオンを目指す
らしい

たまにあとがきに「そらをとぶ」を使って来るが気にしない。こ
の世界に来てもやはりることはゲームとあまり変わらないが性格
とか個体値は気にしない派である（そもそも厳選とかしたらさすが
マズいので）

ちなみに弟子がいたことが判明した（九話にて）多分フラグが立
つている。うん、爆ぜればいいのに

主人公紹介（十一話まで）（後書き）

ちなみに容姿はHG・SSのライバルと瓜二つです

無駄な所とか沢山ある気がしますが、気にしないでください（笑）
他にも更新次第随時更新する予定です。

それでは

第八話 本当のバトル（後編）（前書き）

サブタイトルって付けた方が良いのかなーってたまに思います。
どうぞつ

第八話 本当のバトル（後編）

さあハガネールを倒したのだが……次はどんな奴が来るか

「ゆけつ……ゴローニャ……」

「ゴローニーッ……」

「ゴローニャか。にしてもやる気満々だな

ゴローニャは攻守共に優れるが同タイプのドサイドンのようややステータス面では負けている

しかし「体力満タンで一撃で瀕死になるような技を一度だけ耐える」という特性の「がんじょう」は厄介である
どれほど厄介かというと……「その後の展開次第」で下手すりや3タテは可能であるという事……かな

だが……やはり特殊に弱いのはハガネールと同じなんだけね

「……速攻で決めないと面倒だな。バタフリー、いくよっ！」

「フリ～～！」

何時も通りに返事をしてくれるバタフリー。うん、バタフリーには悪いけど今回は落ちるかもしないな……まあ最後までやらせてもらひつよ～。

「いくよバタフリー！ナジーボール！」

バタフリーは緑色の球体放ち、「ローラー」に接近していく

「…? 来るよー。まもるー!」

「「ロッ!」」

と、守りの体制に入りエナジー・ボールを受け止める

「「ロ……」」

「「ロ……」」

しかし、受け止め切れずまともに受けてしまい、爆風で吹っ飛んでしまう

「「ローラー」」

「「ロッ!」」

エナジー・ボールをまともに受けたせいか、ボロボロである。

やつぱりがんじょうが発動したか……だがあと一撃入れれば…

「なら……ロックカットだー!」

あーーー

そう考えてた俺の考えは甘かつたらしい

そう、「ロックカット」こそが「後の展開」のカギとなるのだか

ら……

「元々素早さの低い岩タイプの補助ともなる技、「ロックカット」 積めばクロバット、又はサンダースといった130族といったポケモンの素早さを超えることも可能である恐ろしい技

そしてそこからのタイプ一致の「ロックblast」とかなり厄介である。この世界じゃ「攻撃は基本的に当たる」という概念は無いのでこれだけでも強力、さらに「つるぎのま」「てこま」なんてやられたら手出し出来ない

はあ……マズいな

「とりあえず回避に専念するぞバタフリー」

「そりはせない……」「ローリーヤー・ロックblast……」
と、突然バタフリーの後ろに「ローリーヤ」が現れる

「つ……？」

はええなオイ! でか何で俺が恐れてる! とばつかするんだ! ? 心読んでんのか「イツはつ! ?

お約束ですよー何となく。 b y 作者

やかましいわっ! ! 「かげぶんしんで交わせつ! !

バタフリーは分身を作り、攻撃を交わしていくが「ローリーヤ」の素早さに対応できずどんどん分身が消されていく……

「……セーダー、ローラー、アーティストはい？」

「ゴロッ！」

アリゴ!?

卷之三

ツハキの声と共にエホホホホンッ!!!と轟音が鳴り響く

晴れた土煙りから現れたのは

アーヴィング

バタフリ一戦闘不能！！ゴロー二ヤの勝ち！！」

た……………ナシタムニ二キタム

するか、田中一郎の体が傾いて……

「！？」「——ヤー！ 戦闘不能！？」

な、なんだつて！？まだ「ローニャの体力はまだ残つて……」「ふう……どくのこなが効いたようだね」！？

そんなツバキさんの言葉が俺の耳に刺さつた……凄い……あんな状態でそんなことが出来るなんて……俺も負けてはいられないっ！！

ふう、つまく決まつたようだね

「戻れ、バタフリー」

サンキューな、バタフリー。頑張つてくれて

「わあ次は『イツでいくよ！スピアーバトルスタンバイ！…』

「お前が最後だつ！がんばれーデサイドン」

スピアーヒドサイドンがフィールドに現れ、お互に睨み合つてこる

「スピアー……また相性の悪いポケモン……」

んーデサイドンを出したあんたもどつかとは思つが、……まあ良いか

「一気に決めるよ！…がんせきほつー！」

つと来たか……だけど……

焦つてゴリ押ししたら負けるよ？

「スピアー、」うる

「スピツ！」

スピアードは「これら」の体制に入り、がんせきほうを受け止め
る

ス―――スピ―――つ―――ト

「…！ 耐えた！？」

焦って攻撃しても意味ないよ？スピア
かむしゃら

卷之三

エカーテンに突っ込んでいくかエカーテンを反動のせいで交わす
ことが出来ない

卷之三

「トドメの心づきを——」

.....

「ドサイドン戦闘不能……スピアーノの勝ち……」

ついしてジムバトルは終わった……

第八話 本当のバトル（後編）（後書き）

次回は急展開……かもね

ツバキ「かもかよ」

それでは次回もお楽し

第九話 ライバル（？）登場 その名は//ドリ（前書き）

九話目です、どう

あと、サブタイトルを付けてみましたつ

第九話 ライバル（？）登場 その名はミドリ

そう言つたのは十代くらいの少女。今、カントー地方の空にいる。

一匹の火の鳥のようなポケモンと一緒に

「あの人は今、この近くに……いた！ あそこだよ！ 一気に急降下して！」

もの凄いスピードで

「 もうすぐ会えるよ、ファーケスつ……」

「フウオオオ―――つ――！」

そう言われた火の鳥…… フイニクスは高らかに声を上げる

もうすぐ……もうすぐで会えますよ!

和たちにしきんな事を教えてくれた船匠……………シノキを
んに！！

「これ……グレーバッヂです」

うーい、グレーバッヂ、ゲットたぜ。……なんてね

「…………」

「…………そう落ち込むなよ、凄かつたぜ？途中でヤバいなって思つたんだからセ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ、一言だけであんな凄い」とできるんだから絶対良いトレーナーになれるよ。ジロウ君」

「そ…………そんな…………というか、名前知つてたんですか？」

ジロウが少し照れた顔で訪ねる

「ん、まあね」

……今思い出したなんて絶対に言えないけどな……

「ツバキさん…………必ず俺、ツバキさんを」「ツーバーキを」「ドオオオオオオオオオオンンツ……」「…………」「…………」

突如、物凄い音がニビシティに鳴り響いた。近くの人も沢山集まつてくる

「何だ…………つて…………！」「何でいるのさ

「…………」

「あいたたた…………やつぱり、急降下はマズかったかな…………？」

少女は服に付いた砂を払いながら言つ

黒いブーツに、緑色の長袖の服。頭の白い帽子っぽいのが特徴的な少女

俺はコイツを間違ひ無く知つていた……

なんせトーホク地方で共に旅をした仲間…………「ハリ」だったのだから……

「お久しぶりです！ツバキさん！…！」

「あ、ああ…………」

俺はいつか無かつた……

苦笑いで

またた溜め息が増えそつだな…………

フィニクス　ふしちょうポケモン

ふしの　でんせつと　いわれている。

しゃくねつの ほのおを はなち

てきを あとかたもなく もやし つくる。

(登場作品、ポケットモンスター、アルタイル、シリウス、ベガ)
非公式である

第九話 ライバル（？）登場 その名は//ドリ（後書き）

と、ということで新キャラと、非公式ポケモンを出しました
おまけに短い……

次回はツバキ／＼ドリです

お楽しみにつ！

サブキャラ紹介（前書き）

ツバキ「オイ作者」

……？

ツバキ「いや、~じゃないだろ。俺のアドレのバトルじゃなかつたのか？」

ああ、…………… w.i.e が逝つたんだ

ツバキ「ふむ…………… ウ……？」

てな訳で急遽 w.i.e で書くことになつたんだよ

ツバキ「マジかよ

マジ。まあ明日なんとかするよ

でわ、どうぞ

……もしかしたら今後プロキオン・デネブのキャラ出すかも

サブキャラ紹介

ミドリ（ヒイラギ・ミドリ）

トーホク地方、ハクジタウン出身。現トーホク地方チャンピオンマスター

現在セトグニ地方（ジョウト、ホウエンの間にある。日本に例えると中国地方）のポケモンを研究していた筈なのだが、何故かカントー地方にやって来た。何故か

ハクジタウンのヒイラギ博士の娘であり、ツバキの弟子。

性格は明るく、頑張り屋であるが後の事考えず、それが原因でえらい事を起してしまったこしおちやめな一面も

現在判明している所有ポケモンはフィニクス・ルカリオ・ガブリアスの三体

十一話でツバキの旅について行く事に

ツバキの事が……？

ジロウ

カントー地方一二ジムのジムリーダー。旅に出た兄タケシに代わり、ジムリーダーを勤めている

バトルの知識、経験は浅いものの飲み込みが早く、将来有望なトレーナーになるだろうとツバキは言っていた

ピンチになつたら、焦つてゴリ押ししてしまい、それが敗北にながつてしまつた。ジムリーダーとしてはまだまだある

所有ポケモンはハガネール、ゴローニャ、ドサイドンの三体。恐らく父ムナー、或いは兄タケシのポケモンである。（ツバキ曰く）

弟のサブロウは審判を勤めている。

サブキャラ紹介（後書き）

作者

突如登場した天の声に等しい存在
八話で登場したが、ツバキに一括される。

引き続き登場を狙っているがそんな事したらツバキに殺されるので出番はこれつきりかもしない

が、十一話でちやつかり登場してしまっている（勿論一括された
が）

どうでも良いがブースター愛好家

所有ポケモンは不明。というか登場しないだらう。多分

ツバキ「……作者の説明はいらんだろ。そして後書きに書くな

えー折角出番があつたんだし別に良いじゃんよ

ツバキ「……あ、そ……」

冷たつ！？

では次回もお楽しみにつ！

第十話 ツバキバナナリ あの壁のコンベンジ果たすため（前書き）

十話目です。エバナリ -.

第十話 ツバキ v.s ミヅリ あの時のリベンジ果たすため

「お久しぶりです！ツバキさん！」

俺の前にいる女の子……それはかつてトーホク地方を旅した仲間の一人、ミドリだった。

トーホク地方、ハクジタウン。

年中寒いが環境は良く、ヒイラギ博士の研究所に初心者のトレーナーは此処足を運ばせることが多かった

俺はそこでアイツらと出会った

「ミドリ、カズキ。この人がホウエン地方のチャンピオンのツバキ君だ」

「ええええええええええええええっ！？チ、チャンピオン！」

あの時はすげえ驚いてたな。まあ新米トレーナーがいきなりチャンピオンに会つたらこうなるか。

俺もここまで驚くなんて思つてなくてびっくりしたけどな

ミドリとカズキはヒイラギ博士の子供で双子である。将来有望なトレーナーになるだろうと町の皆が語つてた

一流のトレーナーになるか、それとも博士の元でポケモンの研究の手伝いをするのか、最初は町の人もめたらしい

「ツバキ君、君にはこの子達と一緒に旅に出てもうえないかな」

そんな提案が俺の耳に届いた。勿論この時、また双子が驚いたのは省かせてもらいつ

まあ俺もホウエンのときは、一人だったし、別に良いんじゃないかなという事で喜んで引き受けた

ここから俺、ミドリ、カズキの旅が始まった

で、田の前にいるのがそのミドリなのだが……

「なあ、カズキはどうしたんだ?」

「ふえ?えっと……お兄ちゃんには、トーホクのチャンピオンの代理を……」

おい、そりや無いだろ。チャンピオンってカナリ暇なんだぜ?
まあ中々チャレンジャーが来ないから勝手に何処かに行つたりしたりすることもあるけどな……

その//ル。……カズキは……

「くつくし//…ん——風邪かあ？」

別の場所でぶらぶらしていた……

「で、なんで此処に？」

「それは勿論、シャクドウ島でのコベンジを果たすために此処にきたんです」

ヒリヒリの表情が変わる

シャクドウ島、そこはポケモンリーグが行われる場所として有名である
俺は予選でヒリヒリ当たり、勝利した

そうこや、ヒリヒリ負けたとき大泣きしてたな……よっぽど悔しかつたんだろう

まあ、分からんでもないが……

バトルをする以上、俺も負けるわけにはいかない。だが……

「……明日にしてくんないかな? さっきのジム戦で疲れてるポケモンがいるからさ。いいかな?」

それにもう夕方だしね

「そういう事なら……分かりました！明日楽しみにしてますね」

「うひしてミドリと明日バトルすると約束し、ポケモンセンターで夜を過ごした……

そして翌日

以下に示すとおり、各満額である。フィークスも一緒に

「審判は俺任せでこなす」

と、ジロウが言い準備が揃つた

「使用ポケモンは三対のシングルバトル、道具の使用は無しだが持たせるのは有り。入れ替えも有りでいいね？」

「まつこ！」

このルールはシャクドウ島の大会を再現したものである

さて……あれからどれだけ変わったか見せてもらひおつかな

「フィニクス！ まずは貴方からだよつ！」

「スピアー、バトルスタンバイ！」

「スピッ！！」

両者のポケモンが繰り出される

フィニクスはほのあ、ドラゴンタイプ

特攻種族値120という厨ポケ級の使い勝手が特徴的
ちと不利かな……

「始めつー！」

「フィニクス、かえんほうじゅで先制を取るよー。」

「じうしゃくごどりでかわせつー！」

まずは素早さを上げ、そこから策を練るか

といつてもフィニクスの素早さの種族値は100以上あるので油
断できない

「わせないつー後ろに回りこんでー！」

……ほらね

と、あっけなくスピアーはフィニクスに背を向けてしまつ

「かえんほうじゅー！」

フィニクスの口から炎が湧き上がる

うふ……今回せんしになるかな？

第十話 シバキョウアドリ あの時のリベンジ果たすため（後書き）

はい、といいついでなんとか十話目が更新できましたっ！

それでは次回もお楽しみに！

第十一話 ツバキ・スカーフリーフィア? いいえ、リーフィスです（前書き）

うん、ラピュタはじつ観ても良じよね

ツバキ「どうせ「人がゴミのよひだ」」とか「三分間待つてやる」とかムスカの迷言で喜んでるんだ」「ひ

やかましいわつ

それはさておき……お待たせしましたー十一話四話ついでー！

第十一話 ツバキバードリ リーフィア？いいえ、リーフィスです

「かえんほうじゅ……」

と、スピアーの背後に炎が迫る

「こうやくこうじうでかわせ……」

「かえんほうじゅ」が発射されるも四段階スピードが上がったスピアーは軽々とその場を離脱する

「ダブル一一ドル……」

「スピリット……！」

フィニクスに連撃を入れる。相性はスピアーの方が不利なもの、ヒット&r;アウェイ戦法でいけばスピアーの方が有利である

「うへ……あの素早さじうにかなんなかあなあ……」

あのスピアー……そう簡単に攻撃なんて当てれないしなあ

攻撃が外れば必ず「スキ」が出てくる。ましてや相手はその「スキ」を狙つて来るので厄介である

向こうにも「スキ」があれば……

「どうづき……」

スピアーの「ビベッキ」がフィニクスに直撃しようとしたその時……

…………「……」「……」「……」「……」

「フィニクス……かげぶんしん……」

「ビベッキ」が直撃すると同時にフィニクスの体がシコツと消える…………

「……？」

突然の事でスピアーも驚いている

さらりにスピアーの周りにはフィニクスが複数いて、囮まれている

「……」それでスピアーは攻撃をかわす事が出来ない……それに本物もどこにいるのか分からぬ……積み技のか大切さ、覚えていたようだね

立場逆転か……短期間でここまでやるとほ……やるじやん、ミドリ

あれ……なんか顔赤くなつてる

…………もしかして声に出でた?

案の定、ミドリ

「えへへ……ツバキさんに褒められた……」

手を顔に当て、赤面していた……

ツバキ、フラグ立て「黙れ駄作者」……最後まで言わせ「ズバツト、エアスラッシュ」……ちょ、待……ギャアアアアアツーーー？

「「つて、こんな事してる場合じゃない！」」

完全にハモりましたね。分かりま「「黙れ駄作者ーーー」」……うわああああん！……ミドリちゃんまでええええつ！！

ツバキとミドリが天に向かって吠える

「「…………」」

その光景にスピアーノとフイニクスも畠然としていた……

「ど、取り敢えずいきますよーツバキさんーかえんほうしゃーーー」

スピアーノに業炎が襲いかかった。よし、これならイケ……え

…………？

しかし、黒煙が晴れた先には、スピアーノがボロボロになりつつも飛んでいた……

「嘘……耐えることなんて出来な「気合いのタスキ。知っている

「おなまえ？」

あ、ヒゲはぬぎこた

確かに耐久力が無いスピアーにはピッタリな持ち物……うう
なんか悔しい……

「残念でしたつ。スピアーリーカ、ダブルードル」

「スピ———つ！！」

もの凄いスピードでフィニクスの分身を消し去り、本体に向かつて突っ込んでいき、フィニクスに直撃する

「フィニクス！？」

お互いボロボロであるおやぢく次の一撃が最後になるだらう……

「うーん、アーヴィング、お前がアーヴィングだよ！」

一キがインハケトで迎え撃て!!!

スピ-----つ！！

両者共に目の前にいる敵に向かつて突つ込んでいく

ドオオオオオオオオオオオオオオオンツ!!

「ファイニクス！？」

「……」

轟音の後の土煙が晴れた先は……

「……両者戦闘不能！」

「「……もどれ！」」

「サンキューな、スピアー」

「ありがとう、ファイニクス」

相性なんか覆すその戦法……やつぱり、ツバキさんは強いなあ……でも、次はそっぽじきません！

「ルカリオ……お願い」

「リーフィス！バトルスタンバイ！」

「……？リーフィスはこの地方じゃあ手に入らない……ということは……」

「ああ、昨日トーホクから転送してもらつたんだ」

やつぱり転送してもらつたんだ……

リーフィスは同タイプのルンバッパの特殊に特化し、さらに防御面もルンバッパを上まる

うう……厄介だなあ……

リーフィス かんようポケモン

ひとを いやす パワーが あり

リーフィスの ちかくに いると

とても こじりよい きぶんに なれる。

(登場作品、アルタイル、シリウス、ベガ)

第十一話 ツバキvsリーフィア？いいえ、リーフィスです（後書き）

ツバキ「今日は作者が拗ねたらしいから後書きは俺が進行する。

今回、リーフィスが少しだけ登場した。

防御、特防の種族値が100を超えてるので、耐久方にはうってつけかな。また、晴れ、雨パでも活躍できるからサポートとしても使えると思う

「うう……どうせ俺なんか……

ツバキ「……まあ、ほつといったらすぐ立ち直るっしょ。

次回もお楽しみに

第十一話 ツバキvsアリゾナ 決着（前書き）

十一 話題です。 えいわく

第十一話 ツバキ vs ミドリ 決着

リーフィスとルカリオ

タイプ相性は互いに普通か。向こうはタイプ一致で押すかな……

「ルカリオ！はどうだん！！」

- २५८ -

卷之三

ニニヤス來モル

卷之二

うし、
いけるな

「ウルオアアツ！！」

と、青いエネルギー球体がリーフィス目掛けて飛んきた。

「つと、リーフィス、受け止めるか？」

それに応じてリーフィスは頷く。「はどうだん」は必中技だしか
わす事は不可能

しかもタイプ一致なので痛い

まあ、いつのコーフィスなら問題無いけどね

「……嘘つー？」

『』覧の通りリーフィスはピンピンしている。さらに持ち物は「たべのこし」で微量回復

『』の耐久型を落とせるか？

「な、う、う、つばめがえし！」

「フイッ！？」

……！また必中技か。しかも、ひこのタイプはリーフィスにとつて弱点属性。ルカリオの素早さはそこそこあつた筈

……俺のスピアーみたくヒット＆アウエイ戦法で完全に潰す気だね

「だが……そこでストップだ。

……やどりぎのタネ」

ルカリオが突っ込んで来たと同時に「やどりぎのタネ」を頭に埋める

「ルオつー？」

当然、これでルカリオは自由に動けない。

「うう……イヤうし……」

「そりやどりも。ギガドレイン」

どんどんルカリオの顔色が変わっていく……

ホントは「どくどく」も入れたかったんだがはがねタイプだから効かないんだよね

まあ、今の状態はルカリオにとつてはかなり迷惑な筈

ヤドリギで体力が減り、リーフィスが自然回復

ギガドレインで体力が減り、リーフィスが回復

更に「たべのこし」の効果でまた回復

多分リーフィスの体力はこれで満タンに近いはず。……ゴメンね、
ルカリオ（笑）

「うう……」

ミドリも半分涙目である。やり過ぎたかな？

しかし、これで止めないのがツバキである

「ソーラービーム、発射」

「フイイイイ――――――――――」

ドオオオオオオオオオオオオンツ――――

「……」

もはや審判、ミドリも顔色が絶望的だ。

後半はツバキの一方的なプレイで後続も同じような感じでボコられたり――

「ガ……ガブリアス……せ、戦闘不能……リーフィスの勝ち……
よつて勝者……ツバキさん……」

「フイ～」

リーフィスも上機嫌である。なんか怖い

ちなみにガブリアスはさつき話した「後続」である――

「げきりん」で押した結果、受け止められそこから「やどつき」
+「ギガドレイン」+「じくじく」+「たべのこじ」のコンボを喰らう、最後に「ソーラービーム」で戦闘不能。

更に「まきつぐ」もされ、動けないので言葉通り「一方的なプレイ」でツバキとリリのバトルはで終わりを迎えた……

「うう……ツバキさん酷いですぅ……」

絶望的な表情に涙目……やり過ぎたな……

「わ、悪い……でもまあ最初の方は良かつたんじゃないかな……？」

「……ほ、ホントですかっ！？」

さつきまでの暗い表情が嘘のようにならへる。気が変わるのはええなオイ

「えへへ……」

ああ……なんか一人で別の世界にいらっしゃった。はあ……

「あ、あの……ツバキさん！」

今まで影だつたジロウが声をかける。いや、影つてないだり……

「ん、なんだ？」

「わ……さつき這いそびれてたんですが……俺、必ずツバキさんを超えてみますからーー！」

「あ～またライバルが増えちゃったね。チャンピオンは辛いよね

「 」

え、ちよ、おま、今チャンピオンって……

「 」

「……意地悪そつな笑み浮かべやがつて……

ん？ジロウがこいつ見て口を開け……あ……

「ええええええええええええええええ……」

……ミドヒ、後でお仕置きだな

俺は耳も塞がつて、そう思つた……

「行つちやうんですか？」

「ああ、そろそろ此処を出ないとヤバいし」「

昨日の「アレ」で俺の正体バレたからな……まああの後ミドヒは「お話」してやつたが

「それじゃ、もう行くわ

「はいー! ありがと「ひじき」ました!」

そうして俺は「ひじき」を去った

……で、

「なんでいるんだよ……」

「えへへ……」

はあ
……

また大変な旅になりそつだな
……

第十一話 ツバキ▼s//ドリ 決着（後書き）

はい、という訳で旅仲間が増えましたっ！

次回もお楽しみにつ

特別話 もうすぐ10000ヒーク突破とこりゃうとや……（前書き）

今回は特別話といつ事でっ！

特別話 もうすぐ10000ルート突破ところへ

もうすぐ10000ルート到達だつ！

ミドリ「ですね！」

ツバキ？「ああ、そうだな」

ミドリ「え、ツバキさんつー…？」

ああ、そいつは平行世界のツバキ。別の世界の文化祭に行つたツバキの代わりにツバキ役として本編に登場するから

平行世界のツバキ「ども、宜しく」

ミドリ「は、はあ……でも代わりとか言つちやつて良いの？」

大丈夫だ、問題無い

まあ、それはさておき改めて読者の皆様に感謝の印を

「「「読者の皆様、読んでくださつて本当に有り難う御座います
」」」

ミドリ「ふつ、これからも頑張れよ、作者

ミドリ「だ、誰ですかっ！？」

？？？「安心しろ。私は今度作者が書く『転生モノ』に登場する

人物だ「

ミドリ「え？ええええつー！？」

平行世界のツバキ「驚きすぎだら」

確かに。まあ、これからも「ポケ世」を宜しくお願ひしますつー！

平行世界のツバキ「そんな愛称あつたんだな……てか略しそうじ
やね」

良いじょんよつ

それでは

特別話 もうすぐ10000ヒーク突破と云ふことだ……（後書き）

？？？「さて、そろそろ私は帰るとあるか。

次は今度作者が書く『転生モノ』でまた会おう。

まあ、すこし先の出来事にかるが……良いんじゃないかな？

読者とまた出会える事を、私は楽しみにしていろよ

第十二話 ハナダシティへ（前書き）

十三話、どうぞ！

第十二話 ハナダシティへ

「はあ……」

溜め息を付ぐ。え、なんでかつて?
それは……

「えへへ……」

「」の通りミドリが勝手に付いて来たからだ

色々な意味でまた大変な旅になると思つと頭が痛い……

最初にミドリとカズキと旅をしたときだって喧嘩ばっかしていた

普段仲は良いくせに喧嘩となると凄いよ。コレが

仲直りにじんだけ時間かけたか……

まあ、今はそんなこと無いし今回まではミドリ一人だけだから喧嘩は
まず無い

問題なのは……

「ツバキさん、どうしたんですか~?」

「ミドリが俺にくつ付いているんだよ……」

目立つし最悪な時はそのせいで追いかけ回された事もあった。まあチャンピオンだもんな……

「な、なあミドリ。少し離れて……くれないか?俺達チャンピオンだったし街の人見られると面倒だぞ?」

それに街の人の視線が危なくなるに違いない。それだけは勘弁だ

「…………はい…………」

「…………ちゃんとしながら離れるミドリ。…………うん、なんかじめん…………何か良い話題は…………」

「…………わついやバツチ幾らへりへりに持つてたりするか?」

「…………ふつふつふつ」

何か怪しげな笑みを浮かべるミドリ。なんか怖い

「実はもういつも手に入れたんですよ!」

そう言つてバツチを見せる。へえ、残つてるのはハナダとセキチクのバツチか

「ツバキさんを探していたら何時の間にか……えく

ふーん……そりゃ俺のバツチは……

「…………あ、俺もひつだ

「…………」

突然黙り込んだミドリ。あ、追い越したかったのか……話ミスつたな

「まあ残ったのはハナダとトキワのと「ハナダのバッヂ持つてないんですかっ！？」…………驚きすぎ」

さつきまでのテンショング噓のようだ

……こいつは何で出来ているんだ？

「だつて久しぶりにダブルバトルが出来るかもしけないんですよ！」

心読んだ？まあどうでも良いか

ダブルバトル

ジム戦の場合この形式でやるジムは多くないが挑戦者が一人いる時など偶に採用される。お互いのチームワークを試すって感じですね

「まあ今向かっているのはハナダシティだし……ダブルバトル出来ると良いな」

「はいっ！その時はお願ひしますつ

俺も、ミドリの変わったとこ色々見てみたいしね

「うと、 そろそろハナダシティに着くかな」

「本当にですか！？』

「……嘘だ」

「わう～……」

「とにかくのむ壁」

「う……意地悪……」

「悪い悪い……」

まあ話してたら時間が経つのも速いな

次はどうなるか……楽しみだな

第十二話 ハナダシティへ（後書き）

さて、次はハナダジム戦だつ

ミドリ「はい！頑張ります！」

並行世界のツバキ「ああ、ジムリーダーが気になるな。ところで作者、代役上手くいってたか？」

まあ、良いんじゃない？

並行世界のツバキ「そりやぢつも」

それでは次回もお楽しみにっ！

第十四話 遂にあのキャラ達と一緒に？（前書き）

十四話です。今回だけ……一?

第十四話 遂にあのキャラ達と……！？

「…………」

田の前にいる少年を見て愚痴を吐いてしまつ……

時間は少し遡る……

「やあ着いた。ここがハナダシティだ」

「わあ…………」

ハナダリは田を輝かせていく。まあ景色が良いつて評判があるしハナダのみさきとかリゾート土地としても有名だからな

「ね、ツバキさんっ！」

「…………ん？」

「これ見てくださいよー！」

そう言つて壁に貼られていた紙に指を指す

「なになに……ハナダ美人姉妹の……水中ショーカー…………？」

「へえ……水中ショーカーか……」

元の世界では餓鬼の頃水族館とかでショーを見たりしてたけど……

「水中ショー」は見たことないな……

つと、俺もまだ餓鬼だよな……

「公演時間まで結構時間があるけど……せつかくだし飯でも済ませてから行くか」

「はいっ！」

と、またミドリが俺の腕にくつ付く

「おいおい……」

「」

ああ、どうからどう見てもカツプルにしか見えないよな……

そう思いながら額に手を当てる俺

しかし、これがキツカケで俺が予想もしていなかつた事が起つた
うとしていたのは誰も知らなかつた……

それは……昼食場で起つた……

飲み物を取りに行つとしたら誰かとぶつかつてしまつた

「あ、すいません……」

「わ、悪い……」

お互いに顔を合わせると……

「え…………？」

肩にはピカチュウを乗せており、赤と黒のキャップを被っている十代くらいの少年……

「う…………ふうなんて思つてもいなかつた人物……」「サトシ」が俺の田の前にいました

「サトシ……」

と、オレンジ色の髪の色で片方を結んでいるのが特徴的な女の子、「カスミ」がサトシの名を呼びながらこちらに向かって来る

「…………? サトシ、この人は…………って…………どこかテレビで見たよ!…………あああああああああつ…………? ? ?」

「うわあ、最悪だ……

「? カスミ、どうかしたのか?」

「どうかしたかじやあ無いわよー?」の人、ほりトレビに映つてたあのチャンピオンの…………?」

「な…………?」の人が…………?」

おい、ヤメる。周りがこいつを見てくれねーかよ

……………

第十四話 遂にあのキャラ達と.....ー? (後書き)

つこてアニメキャラと遭遇ー!

次回もお楽しみにー

第十五話 サトシ vs バキ（前書き）

十五話目、どうぞ！

あとサトシファンの皆様、申し訳ありませんでしたっ！！

第十五話 サトシ vs ツバキ

「こ、この人が……あのチャンピオンの……」

は
周りの人もなんかわらわら集まってくる。我慢の限界になつた俺

「……フリーでイン、テレポートよる」

シユツ

取り敢えずその場を離脱しました

「ツバキさん（サトシ）……………遅いな……………」

と、人が少ない広場にいた少女、ミドリとその隣にいた青年、タケシはそう呟く

シユツ

「うど悪いな!!」
「うど遅くなつた」

「！？ツバキさんっ！」

「サトシ！」

「サンキュー フーティン、戻れ」

「テイインー」

と、フードティンをモンスター・ボールの中に戻す

「 「あのう…………」」

「…………ん? 何だ?」

「 「 「 やつぱり……チャンピオンの……ツバキさん……ですよね?」」

「

「え……ええ! ?」

タケシが驚く。まあさつき屈なかつたから仕方ないか

「…………はあ…………そ、俺がホウエンヒターホクのチャン
ピオンのツバキだよ」

「 「 「 やつぱりやつぱりだつたんですね! ?」」

その質問に俺は頷く。……なんかタケシがポカーンとしている

「あ、まさかチャンピオンにあ、会えるなんて……」

そういふとタケシが俺に迫つてくる

「じ、自分はタケシとここますっ! あ、貴方のよつなチャンピオ

ンに会えて光栄ですっ！」

「お、俺はマカラタウンのサーシとこいます！」

「あ、アタシはハナダシティのジムリーダーのカスミとこいますっ！」

うん、知ってる。てかみんな固まりすぎだろ？

「ま、まあそんなに固まりすぎなくっていいから……別にタメ口で良いから……な？」

「」「は、はいっ！」

あ……駄目だなこりゃ

「あ……あの、ツバキさん！」

「?なんだ、サーシ君」

「俺と……」

「バトルしてくれませんか！」

「は？」

「ごめん、今なんて……」

(俺とバトルしてくれませんか！)

……いやあ、なんですか

「これより、サトシ・ラツバキさんの試合を始めます！ルールは一対一のバトルで行います！」

審判はタケシがやると言つたので任せた……なんでこいつなる

「ちよつとサトシ！開演まで時間が無いのよ！？」

「分かってるって……ピカチュウ、相手はチャンピオンだ、最初から全力でいいわぜ……！」

「ピカッ！…」

サトシのパートナー、光厨……じゃなくピカチュウがそれに応える。うお、やる気満々だなおい

てかサトシの語尾……「ズバッ！」にしか聞こえないんだが

「それでは始め！…」

……まあ、いいや

悪いが開演まで時間が無い……一瞬で決着付ける

「ズバット……バトルスタンバイ！…」

「ズバッズバッ！…」

ん？久しづびりの出番が来て嬉しい？……まあそうだな

「ズバット……俺のピカチュウとじゃあ相性は……」

「まあ相性なんて関係ないさ。サトシ君だつてそうだろう?」

「ピ～～カ～～……チュ～～～～つ！！！」

今や、ピカチュウの代名詞となつてゐるアノ技、「10まんボルト」が俺のズバットに向けて襲い掛かつて来る

「…………かわせつ！？」

「ズバつ！！」

ズバットは簡単に10まんボルトをかわす

「あのズバット、相当鍛えられているぞ！」

……タケシ君、うちのズバットは相当とかそんな甘つちょろい鍛え方はしてないよ？

「ズバット、そのまま上がれ！」

「ズバつ！！」

一氣に上空に上つていく。

急降下！」

ズバ――コ!!

するとどんどんスピードが加速していく！

!! ? 来るぞビガモニヤ !! かわせ ?? ??

週刊文庫

不列颠

風を纏しながらビガモニカは突き込んでいく

ボルテッカー

「ヒカニ!!!ヒカヒカヒカヒカヒカヒカヒカ!!!」

まるで残像のような凄まじい速さで、一いちも雷を纏いながらズバ
ットに突っ込んでいく！

「「いっけええええええつーー！」」

ドオオオオオオオオオオンツ――――――

ぶつかつた時の衝撃波が此処にいる全員を襲つ

「キヤッ！」

「うおつー？」

「…………っ！ツバキさん！」

「ピカチュウ！」

「ズバット！」

上から順にカスミ、タケシ、ミドリ、サトシ、ツバキの五人である

「ど、どっちだ！？」

晴れた煙の先には……

「ピカア……」

「ズバアアア……」

「！？両者、戦闘不能！－！」

「う、嘘…………相討ち…………！？」

ミドリが驚く

まあ確かに驚いたが大体理由は付く

ひこうタイプの物理技の利点……物理全般にとつて速ければ速いほど威力が増すがひこうタイプの場合、他のタイプと比べれば威力が桁違いなのだ

そして、タイプ一致だから威力は更に1・5倍加算され「ブレイブバード」は反動技。これだけでは無い、ピカチュウのボルテッカーだってタイプ一致で1・5倍威力が加算されしかも反動技である

まあ相討ちになるのも無理無いよな…………流石主人公といった所か

「よつて、この試合は引き分け！」

「まさか引き分けだなんて……」

「まあ、久々に燃えたかな。有難う、サトシ君」

「いやあ、そんな……」

俺もアニメのキャラとは会つなんて思つていなかつたし変に興奮したからなー

「…………あ、開演の時間……」

「…………あー? 早くしないと……」「」「」「

「俺とサトシ君はポケモンセンターに行くからアドリは先に行つといてよー」

「はいっ……」

ふう、忙しいよー

その頃……

「へえ、あのズバット結構強いじゃん

「これをボスにフレゼントすれば……

「絶対に喜ぶ筈」や……そして……

「幹部昇任支部長就任良い感じーー！」

「ソーナンス！」

迫り来る三つの影……

果たしてシバキとサトシはどうなるのかー？続くー。

第十五話 サトシ vs ツバキ（後書き）

はい、アニメっぽい終わり方でしたね（笑）

相討ちになつた理由は本編でツバキが話した通り+サトシ君主人公
補正発揮というところでしようか

次回もお楽しみに！

特別話 チャンピオン達のクリスマス（前書き）

一日遅れたところ……

どう

特別話 チャンピオン達のクリスマス

トーホク地方、シャクドウ島。此処はポケモンリーグ以外の行事では滅多に使われない島。しかし今田は、そのシャクドウ島に幾つもの客船が集まつて来ている

「ふー、やつと着いた……此処がシャクドウ島か……」

豪華客船『アント・サンヌ号』に乗つて此処にやつて来た大勢の人の中にいる金髪の青年、旧カントー地方チャンピオン『グリーン』が一息付きながらそう言つた

彼の手の中には一枚の手紙があつた。その手紙に書いてあつた内容とは——

「『パーティ参加資格は新旧問わずチャンピオンのみ、場所はシヤクドウ島、12／26日主催』……か。これだけで本当に良いのか?」

「まあ良いくじじゃないかしら?」

「僕もあの人気がこのパーティで何をするか分からんだけど……なんだか楽しそうだからね」

現シンオウ地方チャンピオン『シロナ』と現ホウエン地方チャンピオン『ミシル』がグリーンの声に反応し、寄つて来る

「あら、レッド君は?」

「ああ、またシロガネ山に籠つてゐるじこよ。んでブルーもレッドの様子を見に行つた……とさ」

「へえ……リア充死ねば良いの」「…………」

「あ、あはは……」

シロナ、ミツルが黒いオーラを放ちながら叫ぶ。その光景、グリーンは苦笑にするしか無かつた

「よつと。ひお……！」此処は何時来ても寒い……な

「そもそも、そうですね、つ、ツバキさん……」

「おっ、主役の登場だね

主役と呼ばれた人物、トーホク、ホウエン地方のチャンピオン『ツバキ』と現トーホク地方チャンピオン『アドリ』が体を震わせがら船から降りて此方にやつて来る

「来たわね、『リア充』」「

「君は家で『ここアドリ』ひやんと『一緒に』お留守番してたら良かつたのにね……」

「い、一緒……だなんて……」

「シロナさん、リア充はヤメロ。んでミツル、何時からやんなに

怖くなつたんだ！？

ミドリは頬を真っ赤にしながら、ツバキは急な寒さで若干青ざめた顔でそう言つ

「……ま、まあ四人とも……外は冷えるし、早く会場にはい」「黙れ、ジムリーダーの分際で……」（・・・・）^o^N…

…

『ジムリーダー』シロナとミシルが放ったその言葉が『深く』心に刺さったのか、グリーンは『酷く』落ち込んで冷たく、真っ白な地面に手を付く

「…………」「…………」

その姿に、唖然としてしまつツバキとコドモ

(キャラ崩壊激しくないか……?)

ツバキは一瞬そう思つたが、殺されるかもしけないので止めた

「い、行こうか……」

「は……はい」

此処にいたら何か危険だと察知したツバキは急いで会場に入る

「……どうせ俺なんて」

「『リア充爆ゼロリア充爆ゼロ』…………」

変わり果てた三人を残して……

「どうも もす です。 この度はもすが主催するパーティに来て
くれてアリアドスが十匹ありがとウルガ m 「主催したのは私よ?
モスギスは引つ込んでなさい」 むう、もすさん折角台本を暗記し
たのにショボボーンのポポポボーンです」

会場に入ると意味不明な言葉を発している変な人、『モスギス』
とこのパーティの主催者であり旧トーホク地方チャンピオン『ギン
ノ』さんが其処にいた

「主催者つてギンノさんだつたんだな」

「あ、睡……いえ、ツバキさん。 お久しフリー ザーのビツも も
す です。

ずっと一人でしゃもじの内職しながら待つてたでござるんですよ

なんかツツコミ所がいつぱいあるけどスルーしよう。 疲れる
だけだ

「いい加減、その変な口癖やめたら? 久しづりね、ツバキ」

ギンノさん、ナイスツツ ハリ有り難つ御座います

「さて、パーティを始めましょうか。ツバキヒルテモハリケン
来たら?」

「はいはい、ここ子だからいつか来て也要と一緒にフレアドライ
ブしましょ。キヤー」

「ええ!?

「……それじゃあ、皆で乾杯でもしましょつか

(無視した……) 「は、はい……」

「それじゃあ、皆一 メリークリスマス!—」

『メリークリスマス!—』

「メリークリスマストライクのストライキでキヤーです。はい

ギンノさんに続いて、一同が言ひ

モスキス、ちゃんとおもつ

「やうこや、なんで26日?」

「できるだけ多くの人を集めたかったのよ。24日や25日、じゅ

あ、家庭の用事とかあるじゃない？ まあ 一日遅れだけど、大勢の方が楽しいでしょ？」

「えへへ、それもそうですね」

「でもこんな所でパーティって考えもしなかったわ」

「ふふつ、そうだね」

あれ、シロナさんにミツル、居たんだ。てか上機嫌だな
そういえばグリーンさんと……

「ハ、ハハハハハ……………どうせ俺なんか……………」

……見なかつた事にしよう。『ごめん

そんなこんなで俺達は他の地方チャンピオン達とバトルしたり、
しゃべったり、騒いだり……大いに楽しんだ。多分、今まで最高
のパーティにちがいないな

「ふう……」

俺は一人外に出て夜風に当たっていた。あんなに冷えたのにパー
ティのお陰なのか、今となつては涼しい感じだ

「そこにいたんですか、ツバキさん」

「ん? ミドリか」

「、ミドリがやって来た……ん?」

突然、冷たい何かが俺の頬に触れた

「……あ、雪……ですね」

「雪……か」

もう何年も見ていないなあ……

と、ミドリが俺の側に寄ってきた

「……さ、今日だけ……一緒に良いですか?」

「……良いよ」

俺はふつと笑いをかけて、ミドリの側に寄る

「綺麗ですね……」

「そ、う……だな」

「来年も……一緒に見れると……良いですよね」

「うん……そうだな」

氣が付けは……俺達は手を繋いでいた

「…………ふふ」

「…………えへへ」

「…………」

しかし、後ろにいた『誰か』によつてそのムードは破壊された

そりーー

「「口へ…………リア充ガ…………」」

…………振り返ると、黒いオーラを放つて立るシロナセとシルの姿が……

「「爆発シヤガレヒヒヒヒヒヒーー！」」

はあ……私は……良いクリスマス……迎えたか？

そう思い、俺は意識を失いました

その頃——

「……ぐすつ」

招待されず、忘れられていた『カズキ』とかいう名前の少年が一人、ハクジタウンにいたんだとさ

特別話 チャンピオン達のクリスマス（後書き）

はい、クリスマス記念の特別編でしたつ
モス、ギスは本当に意味不明です
でわつ

……ツバキ、一回爆発しろ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489y/>

ポケモンの世界に来てしました。

2011年12月26日21時04分発行